

就実大学薬学部における早期体験学習の実施とその評価

○島田 憲一<sup>1</sup>, 谷口 律子<sup>1</sup>, 毎熊 隆誉<sup>1</sup>, 牧野 和隆<sup>1</sup>, 大塚 智恵<sup>1</sup>, 西村 多美子<sup>1</sup>, 塩田 澄子<sup>1</sup>, 五味田 裕<sup>1</sup>(<sup>1</sup>就実大薬)

【目的】就実大学薬学部では、1年前期に開講される「薬学への招待」という授業科目の中で、病院・薬局への早期体験学習を実施している。早期体験学習は薬学部設立当初より、多くの医療機関のご協力を得て実施されてきたが、大学側、受け入れ施設側共に手探り状態の中、試行錯誤している状態である。そこで今回、早期体験学習プログラムへの意識および評価を把握する目的で、終了後に学生にアンケート調査を実施したので報告する。

【方法】早期体験学習では各学生それぞれ、薬局1施設、病院1施設を訪問した。訪問する前に学習計画書をグループ毎（各グループ2～10名）に作成し、訪問施設に事前に送付した。訪問後はグループ毎にフィードバック報告書を作成し訪問施設に送付した。また訪問後にはグループ毎に各施設の情報に関して手書きのポスターを作成し、発表会を行った。学生へのアンケートは最終講義時に行い、満足度の測定によるCS分析を中心に解析を行った。

【結果・考察】アンケート調査の結果、93%の学生が、早期体験学習を「とても有意義である」「有意義である」と回答した。またCS分析の結果から、要改善項目として挙げられた項目は、「ポスター発表」「訪問時期」であった。重要維持項目として、「指導薬剤師」「指導教員」「体験時間」に関する項目が挙げられた。これら解析から、全体的な満足度は非常に高いものであり、早期体験学習が学生にとって有意義なものであったと考えられるが、各訪問施設の情報を共有する目的で行ってきた「ポスター発表」について、また入学後2、3か月以内に設定した「訪問時期」について、学生に理解され、満足されるようなプログラムへの改善に取り組まなければならない。